



夏号



フォトコン入選“優秀賞”作品名「新緑爽やか」
by もったん

民話を楽しまう

民話 ゆうき 空を走る人魂

ひとだま

文・結城市教育委員会
挿絵・佐々木 明



七月の雨が降るある夜のことでした。まだ八つになったばかりの良吉は近くのお屋敷まで使に行った母親の帰りがおそいので、かさをさして、むかえにでかけました。

そのころの結城の町には、またお屋敷といわれるほどの古い家なみが、そちこちに残っておりま

とりわけ、昔、お城のあったいまの本町あたりには、りっぱな由緒のある家がありました。ですから土地の人は、本町をお屋敷と呼びならわしていました。

2



「これは結城市の本町といつて、心がしびるな……」

じいちゃん、どんなおはながあったの？

3

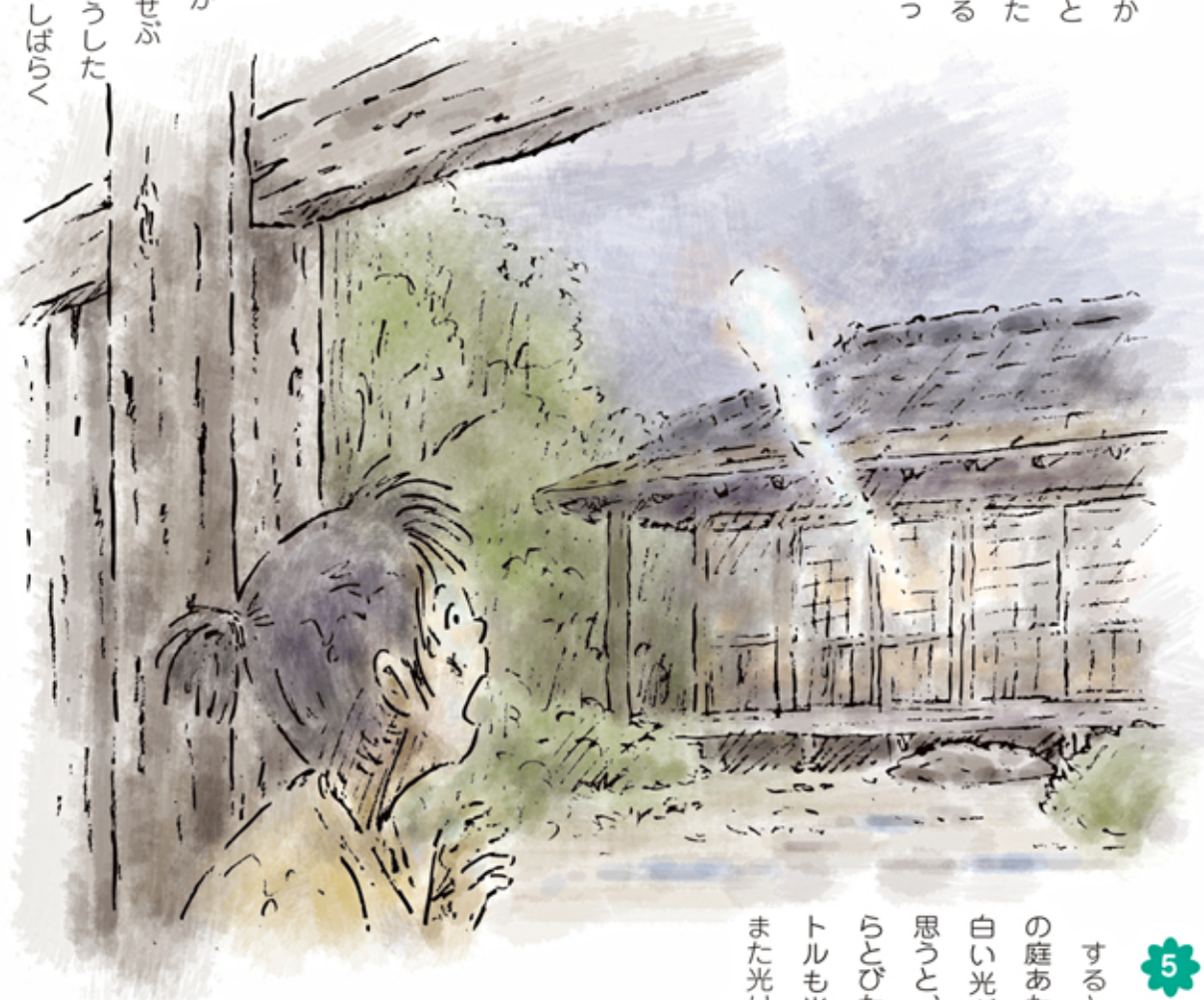
この高台のお屋敷から少し東へおりにいくと、田んぼの中にそまつな家がありました。良吉はここに母と二人で住んでおりました。良吉が六つになったころ、父親はやはり病で亡くなってしまったので、母と二人だけのさびしい暮らしになってしまったのです。



★わらしべ協賛店「一ビス引換手形」
有効期限：2011年
7月わらしべ発行～
8月31日まで

母は百姓しごとのかたわら、人からたのまれた着物仕立てのしごとをしながら、ほそぼそと暮らしをたてていました。塙台さまとよばれるお屋敷の門の前で、良吉は母を待つていましたが、なかなか出て来ませんでした。

雨はときどき激しく降り、またふっと休んだりしました。暗い通りはもうだれひとり歩くものもなく、道の両側からは大きな木がおおいかぶさるように道にせまっております。良吉はもう待ちきれなくなつて、くへり戸から中のようすをのぞいてみました。すると、書院とよばれるへやのあたりから、障子をすかしてあかりがもれ、人々の泣きむせぶ声がかきこえてくるのでした。「どうしたのだらう。「良吉はふしぎに思ひ、お屋敷の中をのぞいておりました。



すると雨のやんだ書院の庭あたりから、きゅうに青白い光がゆらゆらと立ったかと思つと、すつと長い火足をひきながらとびたちました。その光は、二、三メートルも光つて見ると、またふつと消え、また光りながらとんでいきました。

良吉はなぜか、いままでに感じたこともないおそろしさを感じ、その場に立ちすくんでしまいました。

まもなく母親が門から出てきました。

「おや、来てたのかい？ 待たせたらうね。このおじょうさまがぐくなられてたいへんだつたのだよ。」
母親はそついいながら良吉の肩をたたくようにして歩きました。

「いひなされたのっ。」
「いひなされたのっ。」
「いひなされたのっ。」

雨はすっかりあがって、暗い空に星さえ見えてきました。田んぼ道にくと、かえるの聲が天にひびくようにきこえてきました。

それからというもの、人々は、だれかが亡くなるときになると、きまって、あやしい光があたりを飛ぶのを見かけるようになったということです。

7

そして、だれが言うともなく「亡くなられた人の人魂が、からだをはなれていくのだ。」とうわさされるようになったということです。

また、この人魂は十才の頃までに見なければ、一生見ることはな
いとも言われています。

